

まちひとしごと

Vol. 11

ROKO SKI うちやま あきら
内山 章さん

スキーの町で生まれたモノづくり



倶

知安駅舎の一角に昨年12月にオープンしたスペースがある。ここは町内で主に体験観光事業を行う㈱NACが始めたスキーブランド『ROKO（ロコ）』の製造・販売を行う工房兼店舗だ。

ここで、板の製造以外の、ほぼ全てに携わる内山さんに話を聞いた。倶知安育ちで幼いころから雪とスキーに親しんできたという内山さんは高校卒業後、道外の大学に進学した。

「大学在学中に、ボブスレーを始め、ナショナルチームにも選ばれる中で、卒業後は地元に戻り、現在も所属する㈱NACで働き始めました」

夏はラフティングガイド、冬はボブスレー日本代表選手として、主に海外を転戦していたが、バンクー

バーオリンピックへの出場を逃したことを機に、ボブスレーを辞め、㈱NACの社員として働き始めた。そして平成26年頃に、かねてより同社社長ロス・フィンドレー氏が思い描いていたという、メイド・イン倶知安のスキーブランド『ROKO』のプロジェクトが動き始め、その当初から、このプロジェクトに携わってきた。

「スキーの町倶知安で育った自分が、倶知安産のスキー板づくりに携われるということは、単純に面白そうだなと感じました」

そこから、ロス・フィンドレー氏、当初未経験ながら現在ではスキー板の製造を一手に担う工場長の石山さん、そして内山さんの3人を中心に、テストライダーの協力を得て試作を重ねながら開発を進めてきたという。

『ROKO』のテストライダーに、プロはいません。倶知安で生活をし、ニセコの山々を拠点にスキーを楽しむ人々に履いてもらい、その感想や意見をフィードバックすることで、ニセコの山を楽しむためのスキー板をつくっています。いいものをつくりたい。そう思えば思う程に、スキー板づくりに終わりはないと感じます」

多くの試行錯誤を経て、スタートした『ROKO』のこれからについて話を伺った。

「この工房では、大手スキーメーカーのように大量生産することができないからこそ、ひとつひとつのモノづくりに対し、色々なチャレンジをすることが出来ます。様々なデザインの中から乗り手がスキーを選択できることも含め、ここでしかつくることができないものを提供できればと考えています」と内山さん。

「スキーの町倶知安で、そこに住む人たちの手でつくられているからこそ、地元の人にも、使ってもらいたいです。いつか地元の子どもたちが自分たちでデザインをし、その板に乗ってゲレンデを滑っているようになったら面白いですね」と楽しそうに話していた。

ハワイには『LOCO（ロコ）』という言葉がある。これはLOCALつまり地元民を表す言葉だ。つづりは違うが、『ROKO』でつくられるスキーは、まさに地元とそこに生活する人があってこそ完成するのではないだろうか。